

授業実践報告

## 「保育表現技術（言語・教材）」の授業における実践報告

Practical report of class  
 “Expressive Technique in Childcare (Language and Teaching Materials)”

橋本 祥子

Key words; 言葉 表現技術 保育現場 児童文化財 体験型学習

## I はじめに

茨城女子短期大学保育科では、「保育表現技術（言語・教材）」（演習2単位）を1年次の前期に選択科目として開講している。本学では、1年生の9月に本学附属幼稚園において5日間の教育実習を行い、その中で学生は15分間の部分実習を実施する。本授業では、その担当する部分実習で実践する教材研究や実践力の向上等に重点を置きながら授業内容を構成している。1年生の9月というと、多くの学生にとってはまだ読み聞かせの理解すら不十分な時期であるため、この「保育表現技術（言語・教材）」の内容が実習に向かう学生にとっては非常に必要性の高いものとなっている。

そのため、これまでの授業内容もかなり保育現場を意識し、保育や子どもたちの実態に即したものとなるよう工夫してきている。

保育現場では、折に触れてクラス全員が集まる機会がある。子どもたちはリラックスしながら保育者を囲み、話し声が少し聞こえてはいるが読み聞かせが始まると空気は一変し、あっという間に物語の世界に入り込んでいく。その眼差しは力強く輝き、美しいものである。

幼稚園教育要領解説（平成30年3月）には、「幼児は、教師や友達と一緒に行動したりやり取りしたりすることを通して、次第に日常生活に必要な言葉が分かるようになっていく。また、幼児が絵本を見たり、物語を聞いたりして楽しみ、言葉の楽しさや美しさに気付いたり、想像上の世界や未知の世界に出会い、様々な思いを巡らし、その思いなどを教師や友達と共有したりすることが大切である。このような経験は、言葉に対する感覚を養い、状況に応じた適切な言葉の表現を使うことができるようになる上でも重要である。」と書かれている。

大好きな保育者が、自分たちのために児童文化財を通して語りかけ演じる時間が、子どもの気持ちを安定させ豊かな心を育てていく。さらに、言葉を獲得しながら、目の前には見えない物語の内容を思い浮かべることで、想像力も発達していく。

保育現場でそのような時間を子どもたちと共有するために、授業ではグループワークや製作活動を通して、学生自身が豊かに表現できる力を身に付けていくことを目標としている。と同時に、子どもの主体的な生活が豊かになるように支援する力を身に付けることも目標である。

また、年間の季節の巡りの中で生活をしている子どもたちに読み聞かせを行う場合、季節や行事等、目的に応じた内容を選ぶことが求められる。さらに、対象となる子どもたちの年齢（発達段階）や人数、時間帯等も考慮しなければならない。そうした読み聞かせ等の対象、時と場合に応じた教材を適切に選択できる力を授業の中で育てて行くことも非常に大切であると考えられる。

一方で情報化社会と言われて久しい今日、家庭にいてもスマートフォンが一台あればインターネット機能でどこにでも繋がる時代である。動画を開けば、読み聞かせ、ペープサートやパネルシアター、エプロンシアターに手遊び、触れ合い遊び、集団遊び、そして折り紙の折り方まで事細かく見ることができる。しかしどのような時代であれ、子どもにとってはやはり保育者等が直接語りかける肉声を、息づかいや視線を感じながら聴き、絵（動き）を見て美しさを感じ取り、音としての言葉の楽しさを味わい、その時間を共有すること、それらを通して心が安定し、五感が育ち、豊かな人間性が培われて行くことに変わりはない。

いかにして、時代や環境の変化に応じつつ、保育の中で大切に受け継がれてきた児童文化財を子どもたちに、若い保育者に伝えていったらよいのだろうか。本稿では、主な授業内容としている児童文化財の魅力やその活用方法について改めて見直し、内容を理解し、製作・発表する活動の取り組みを振り返り、その成果と課題を明らかにするとともに今後の授業の在り方を考えていきたい。

## II 授業概要

### 1 教材研究と実演

言葉に対する感覚を豊かにする教材研究を通して自分自身の感性を磨き、子どもの言葉をしっかりと受け止め心を通わせられる保育者を目指すこと、教材を作ることや発表すること、発表を見ること等々の全てが今後の実習や現場での保育に役立つ貴重な体験になることを伝えられるように、体験型学習を計画した。

回	内容	実践者	発表の対象
1	領域「言葉」について		
1	アンケート (昔話等46冊について ①知っている ②聞いたことがある ③知らない)で回答		
2	マジックピクチャー	製作	個人
3		発表・提出	クラス全員
4	絵本 0～2歳児	読み聞かせ	個人
5	3～5歳児	読み聞かせ	個人
6	紙芝居	読み聞かせ	個人
7	人形劇・ペープサート	話し合い	グループ
8		製作	
9		発表・提出	
10・11	パネルシアター	製作	個人
12		発表・提出	
13	エプロンシアター	実演	グループ
14	ことばあそび・わらべうた	全体	全員
15	成果発表・まとめ		

2019年度 茨城女子短期大学前期シラバスより 著者が作成

初回の授業で実施したアンケートの結果を基に、それぞれの回の最初には、各児童文化財の歴史や意味、活用方法等についての講義をし、一例を実際に演じて見せている。

また「本日の一冊」として、季節や行事に応じたものや是非知っておいて欲しいもの、アンケートで未読の学生が多かった物語等を、必ず1冊読み聞かせをすることを積み重ねている。

### 2 作品について

学生は各回の作品について、「自分の作品について、工夫したところ・アピールポイント」を記入して提出する。発表を見る時には、良かった部分等の感想を記入する。絵本、紙芝居については、タイトル・作者・出版社・本があった場所・下読みの回数・選んだ理由・何歳児を想定したか・読み聞かせをしてみた感想。他の学生の発表を聞いて、タイトル・作者・出版社、感想を記入したリアクションペーパーを提出する。

### 3 事例

#### (1)マジックピクチャー 材料 紙皿2枚

<作製手順>

- ・ 話を考える。
- ・ 紙皿2枚にBefore・Afterの絵を描き、中心まで入れた切り込みを噛み合わせる。

- ・ 2枚の紙皿を回転させるにつれ、始めに後方にあった絵が上に移動してくる。最初の絵皿を見せている時と回転させている間、変化した後を物語として語りながら演じる。

<学生の工夫・振り返り>

- ・ 身近な題材を選んで作っていた。
- ・ 紙皿の裏を利用し、3場面4場面のストーリーを展開する学生がいた。
- ・ 身近なものを使って作品を創り出していく楽しさや、それを誰かに見てもらう達成感を味わっていた。

<指導上の課題>

- ・ 入学直後のため、人前で演じることに抵抗を感じ照れる学生が多い。
- ・ 創ることが目的になり、まだそれを利用して子どもたちの前で演じることまで考えられない様子が見られる。



<演じる際のポイント>

- ・ 「見せる」「見られている」という意識をもって発表する。
- ・ 絵皿に描いてある絵の説明だけではなく、物語として話す。
- ・ 声の大きさやトーン、表情等にも気を付けて発表する。

(2) 絵本

<手順>

- ・ 0～2歳児向けと3～5歳児向けの2回。それぞれの年齢に合うと思われる絵本を一人一冊持ち寄り、4～5人のグループ毎に読み聞かせを行う。

<学生の工夫・振り返り>

- ・ 絵本を自分一人で開いて読むよりも、相手に向けて見せながら読み聞かせる方が読みやすく、時間がかかることが分かる。
- ・ 読み手の頭が絵本を隠していることに気付く。
- ・ 9月に行われる読み聞かせの部分実習への心の準備ができる。

<指導上の課題>

- ・ ブックスタートの事例にも触れ、絵本は内容や文字を伝えるのではなく、楽しいひとときを共有することが大切であるため、自分が楽しい、好きと思える絵本を選ぶようにすることを伝える。「赤ちゃんの体の成長にミルクが必要なように、赤ちゃんのことばと心を育むためには、あたたかなぬくもりのなかでやさしく語り合う時間が大切です。」  
<http://opac.city.kashima.ibaraki.jp/bookstart/> (2020年3月1日参照 鹿嶋市立中央図書館HP)
- ・ 一度に5～6人が読み聞かせをしている中で、一人一人に対しての具体的評価の伝え方を工夫する。

<演じる際のポイント>

- ・ 絵本を子どもたちが見やすい角度で開き、絵本を読み手の頭で隠さないように持つ。
- ・ 次ページへの移動を、スムーズにできるようにする。

(3) 紙芝居

<手順>

- ・ それぞれが選び持参した紙芝居を、グループ毎に紙芝居舞台を使用して読み聞かせをする。
- ・ 自宅に紙芝居がある学生は少ない。図書館に足を



運びきっかけにもなるように、大学や地域の図書館から借りて来るように促す。

<学生の工夫・振り返り>

- ・ 演じ手の役割が大きいことに気付いた。
- ・ 紙芝居を抜くタイミングが難しい。

<指導上の課題>

- ・ 教室の大きさの関係上、演じ手と聞き手の距離が思うように取れないが、二つの教室を使うと、十分に指導が行き渡らない。

<演じる際のポイント>

- ・ 「芝居」であることを意識し、登場人物の気持ちを考えながら演じる。
- ・ 文字を追うことに夢中になり、頭が紙芝居舞台の後ろに隠れてしまう。声がかもらないように、子どもたちの方を見ながら話す。
- ・ 抜くタイミングに配慮する。

#### (4)人形劇・ペープサート



《3びきのこぶた》

<手順>

- ① 5～6名のグループに分かれる。
- ② 内容を考える。
- ③ 絵人形作製や発表の分担をする。
- ④ 絵人形を作る。
- ⑤ 発表する。発表を見る。

<学生の工夫・振り返り>

- ・ 既存の物語や歌等を題材にして製作する。
- ・ 他グループの発表を見て、自分たちでは考えなかった工夫がされていることに気付き、いろいろな方法があることを知る。

<指導上の課題>

- ・ 授業内では、初めてのグループ活動になる。自分の考えだけではなく、他の学生と意見を出し折り合いながら作業を進めていくことを学ぶが、グループ決めの段階でもめることもある。

<演じる際のポイント>

- ・ グループのメンバーでよく打合せ、何度も練習をする。
- ・ 自分の絵人形の動きが、見ている子どもたちとは向きが逆になることを意識して演じる。
- ・ 話をしている絵人形は、大きく動かす。

#### (5)パネルシアター



《自己紹介》

<手順>

- ・ 内容を考える。
- ・ 絵人形を作る。
  - ① Pペーパーに下書きする
  - ② 彩色する
  - ③ 切る
  - ④ 表裏、裏打ち等仕掛けを加える

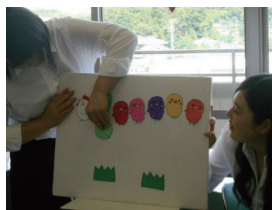
・ 発表する。発表を見る。

<学生の工夫・振り返り>

- ・ 既存の物語をパネルシアターにアレンジしたりシルエットクイズや自己紹介などを考えたりし



《シルエットクイズ》



て個性あふれる作品ができる。

- ・ パネル布とPペーパーの摩擦によって絵人形が着くことや語りながら動かせることを面白いと感じ、その後の実習用に新たに作る学生もいる。

＜指導上の課題＞

- ・ 学生により作りたい作品に差があるため、細かい仕掛けの説明が不十分だった。
- ・ 多くの学生が、中学校や高校での職場体験等の授業で保育現場を訪れているため、パネルシアターそのものは見知っている。しかし、Pペーパーに絵を描く経験や演じる経験は無いため、難しさを感じていた。

＜演じる際のポイント＞

- ・ 同じ絵人形でも張り方によって見え方が違うことを理解して演じる。
- ・ 絵人形に動きが感じられるように、貼ったりはがしたりする。
- ・ パネルボードを準備する。

#### IV まとめ

初回の授業で実施したアンケートの結果から、ポピュラーな絵本ですら「知っている・聞いたことがある」と回答した学生が少なく、育ちの過程で十分に読み聞かせを経験していない学生が多いことがわかった。そのような実態をもとに、まずは学生自身が絵本や物語の楽しさを経験し、それを子どもたちに伝えられるような技術を身に付けることを大切にしながら授業内容を考え進めてきた。

その結果、学生の授業後に書くコメントからは、「製作は苦手だけれど、楽しかった」「是非実習で使いたい」「自分では思いつかないアイデアがあって勉強になった」「読み聞かせが毎回楽しみだった」などの意見が多く寄せられ、やはりネット等で簡単に映像が見られる時代ではあっても、授業の中でお互いに読み聞かせをし合ったり演じ合ってみたりすることで身に付く力は大きいことが改めて確認できた。

一方で、今後の授業の進め方についていくつかの課題も明らかになった。

まず、ひとことに児童文化財といっても、保育現場で用いられる児童文化財は読み聞かせ、素話、ペープサートやパネルシアター、エプロンシアター、手遊び、触れ合い遊び、集団遊び、そして折り紙等々大変に種類が多い。限られた授業時数内で一つ一つについて十分な時間を取ることが難しい状況の中で、いかにして学生がより多くの教材に触れることができるよう授業構成を工夫するかということである。そのためには、授業内容の精査とともに、学生の授業へ取り組み意欲の差も大きいため、多くの学生の興味を引き出せるような授業展開の工夫も必要である。

さらに、少しでも多くの内容を伝えたいと思う余り、詰め込みすぎて学生が十分に理解できにくいことも課題としてあげられる。学生が、授業で学んだことを整理しつつボランティアや課外活動の機会を利用して実施することで、自身の課題を自覚し自分のものにしていく時間の提供も考えていきたい。

子どもたちが絵本やお話の楽しさを味わい、豊かな心や人間性を育てていくためには、まずは保育者となる学生自身が心から楽しい、好きだと思う絵本や物語を選ぶ感性や力を身に付ける必要があると考える。それらを育てる教員もまた、感性を豊かにし、さらなる教材研究を重ねていく必要があることを改めて認識した。

参考文献 『実習に行く前に知っておきたい保育実技 児童文化財の魅力とその活用・展開』

久富陽子 編 萌文書林 2017年